

猪犬と登る猪獵の頂点へ

猪獵の上級編 ② 田宮治

恐ろしいガリの正体

危険で恐ろしいガリだったのだ、犬たちはあえて咬み込みに出ずに終始離れて戦っていたようである。「こんなに素晴らしい戦い方ができるから見事に完勝できるのだ」と、しみじみ満足してどっかりと犬たちの真ん中に座り込んだ。犬たちも満足気に私に寄り添い、疲れた体を腹這いにして休んでいる。

「ん」と言い、平野氏も目を輝かせ「そうだよ」と頷いている。北嶋氏は「そうすると、大猪一頭はあの小峰を真下に下りて逃げたのだ」と悔しそうに言う。私も仕方なく「そうだったのか」と相槌を打った。

そこに平野氏と北嶋氏が飛び下りて来た。そこに横たわっている猪を見てびっくりした表情で「撃つたのはこの猪か？ おかしいなあ、もっと大きい一三〇キくらいキの猪と戦い続けていたのに……」と北嶋氏は不満気と言う。さらに、「どうしても納得できないように、どうしても納得できないように、」と平野さ

北嶋氏と平野氏は「猪と三十分以上も戦い、二人で猪の近くまで寄り付いて撃ち込むチャンスを狙っていたが、身を守る立ち木が一本もなく危険だったので、それ以上は近寄って撃てなかった」と、その時の様子を詳しく話してくれた。

め猪獵を完成することも、先に繋げることもできない。山の中腹で立ち木や大岩を楯にして戦うのはガリの得意の戦術であるが、一流犬ならそんなことは心得たものであり、立ち木で弱点の尻が守られているのだから、むざむざと咬みに入るようなことはしない。それをいいことに猪は犬たちを突いて出て、また安全な立ち木の根元に戻り、犬たちを突いて攻撃を続ける。

次に、戦いで特に注意しなければならぬのがガリの特徴である。ガリはとてつもなく強く、その上、俊敏で戦い慣れている。そのため、戦いの現場（止め現場）では必ず大木の根元か大岩を楯にして弱点の尻を守り、絶対に犬たちの攻撃をまともに受けない有利な状態で戦うのである。

話の内容から二人の戦う様子が手にとるように分かるが、こんなガリ相手ではやはりここが勝負どころのようだった。犬たちが三十分以上も猪と間をとって戦い続けているのだから、何としてもここで撃ち獲ってやらないことには止

この犬たちを突いて出る時と、立ち木の根元に猪が戻りクルリとこちらに向きを変える瞬間が、まさに撃ち込むチャンスなのである。何回でも突いて出る猪を犬たちがパツと身を交わす。すると勝ち誇った猪は尻尾をピンと立てて意気揚々と立ち木の根元に戻るの

さらに、何も慌てることはない。落ちついて戦法を考えて、あくまで安全な方向から少しずつゆっくりと静かにできれば必ず獵人を突いて来るので、身を守る立ち木などを伝って慎重に寄り付き、撃ち込むチャンスを待つて一発で撃ち獲るのである。

さらに厄介なのは、猪が有利な状態なので迂闊な寄り付きは厳禁である。必ず突いて来ることを覚悟しなければならぬ。ガリの突進は恐ろしい上に凄く速攻である。特に重要なことは、実戦の中でガリの雄姿である。それは痩せ細ったガリのイメージとはほど遠い全身総毛立てた堂々たる大猪なのである。その大猪が忙しく動き回り犬たちと攻め合っているのだ

から、撃つても総毛立った全身なのでなかなか急所に命中しない。その結果、矢強いことになっていく。そして、痩せて強いので犬たちとの戦いでは必ず余裕を持って止まり、逃げようと思えばどの方向へでもあつという間に逃げ切るのである。

ところで、北嶋氏は撃ち獲ったガリを見て、「もつと大きな一三〇^キくらいの大猪と三十分以上も戦い、必死で寄り付こうとしたが、あと一步のところまで真下に飛び下りて逃げられた」と言ったことに對することだが、その答えは何度もガリとの戦いを体験してみればすぐに判断できることである。

北嶋氏が「二頭の大猪が止め現場にいた」と誤って判断した理由は、次の二つの説明で立証できる。一つ目は、ガリガリの痩せた猪が犬たちと戦う時になると堂々たる大猪に化けて全く別の大物に見えるという事実である。二つ目は、そんな強く動きの速い化け物では、名犬のマロ号、シロ号、ヨシ号の三頭が頑張ったとしても、一度に二頭のガリを止め切ること

などできないのである。

さらに、北嶋氏と平野氏が戦っていた止め現場から逃げて私の真上から飛び下りて来た猪は、まぎれもなく見せかけの大物である。その事実はマロ号、シロ号、ヨシ号が猪の後ろにがっちり付き、押しまくって落としてきたことで間違いないと証明できる。

私がガリとの一戦にこだわってしつこく説明しているのは、戦う機会は少ないが並外れた強さを持つ恐ろしい相手だからである。その正体を知ることが猪猟の極致到達に欠かせないことなので、この戦いの中で掴み取って極めていく以外にないのである。

この激戦に勝つことで、ガリとの対決はいかに厳しいものであるかを、接戦を勝つことで猪猟の極致を知ってもらいたいのである。そのための条件がガリの正体を知ることなのである。

北嶋氏に限らず、猪猟人なら自ら肝に銘じて決して忘れてはならないのが、「ガリとは、ただの大猪ではない」という事実である。このことは猪猟をやる上で生涯忘

れてはならない大切なことである。

もしこの事実を見誤ってしまうと、当然、その戦いは失敗や苦戦を強いられる。たとえ犬芸や猟技術があつても、とても極致到達は望めないのである。

基本的に獵場で出くわす猪の大物と小物では、大きく異なるに比例して強さも闘争力も増すものであるが、肝心の戦いの要点である敏速さでは、特大猪が動きが鈍く、順次中物から小物になるにつれて俊敏になってくる。

要するに、実戦で小物（六〇^キ程度）を侮ったりすると、俊敏な上に逃げ一手となるので、単独猟などでは獲りづらい相手となるのである。また、一三〇^キを超える大物になれば戦う自信があるのですぐに止まる。ここからが本場の戦いとなるので並の犬芸では太刀打ちできないが、一流犬群ならば意外なほど簡単に撃ち獲ることができるのである。

そこで、問題のガリはどうかというところ、この正体は大猪の強さと中小物の俊敏さを併せ持っているとしてつもない猛猪である。獵野に

生きるオス猪同士の勝者であり、種オスとして戦い慣れて痩せ細った大猪だから小さく見えても強くて速い。そのため、並の犬では一撃で切られたり殺されたりするのである。

獵野に君臨する山の主

私が繰り返してガリの特徴を証してまで、ガリとの一戦を重視しているのは、恐ろしく危険なガリとの実戦を体験しなければ、決して分かりはしない猪猟の完成までの大切な要点がぎつしりと凝縮しているからである。

私は今日の一戦を大事な戦いの集大成にしたいと思っていた。ところが、猪を追っている途中で猪跡を見て「ガリかもしれない」と思い、北嶋氏が猪に逃げられた一回目の猪止め現場を検証してみると、「これは間違いないガリである」と確信した。

ただし、この時点からの作戦を立て直しは不可能だったので、既に先に犬たちと猪を追っている北嶋氏にすべて任せただけである。だ

猪山は雑木林で山を歩くだけでも楽しくなる。当然、登山者も多いので、犬の訓練では絶対人に吠えつかないようにしておくべきである



ナオ号の仔犬たち。ナオ号は千代号の母で、良い仔犬がぞっくり揃っていて、バラツキが全くなく固定している

から、全体の流れや作戦の変更は全員を迷わすことになるので指示するわけにいかなかった。

今回の至難を乗り越え見事な完勝で飾り、ガリ戦の必勝法を見せ、次世代までも繋いでもらうためには、北嶋氏の後を追っている私一人が指示役に回って対応する以外にない。そして、何がなんでも単独猟の戦法でガリを撃ち獲らねばならないのである。

北嶋氏は立派な親方となって全員が力を合わせて実に見事な作戦で戦っているが、残念ながら第一現場で戦った相手がガリであることに気付いていない。第二現場では大物と中物の猪二頭がいたと思っただけである。そして、最後の撃ち止め現場を見て、私が撃つた猪は第二現場にいた中物の猪で、大物は小峰を飛び下り逃げ切ったと判断したのである。

猪と戦う以上、当然、まず相手がどんな猪であるかを知るべきである。その上で順次戦いの流れの中で相手を凌駕する対策を立て、先手をとって攻めまくるのが常道である。

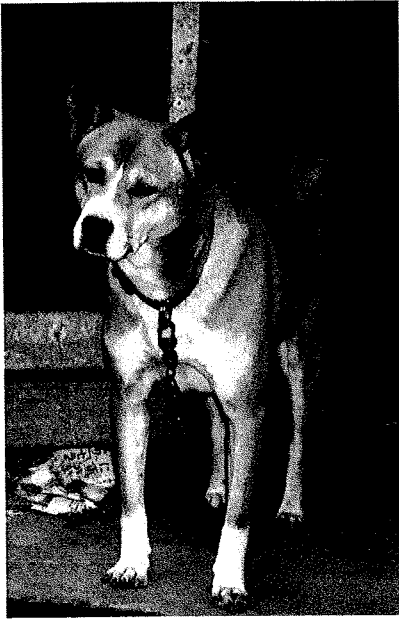
しかし、残念だと思ったのは、北嶋氏がガリだと気付かなかったことではなく、私がこの二年間でガリとの対峙がなかったことから、その戦いを見せられなかったことである。

滅多にない宿敵ガリとの戦いは、気が付かなければ何事も無い普通の大猪と対決しているようなものである。ただ一つ違うところは必ず逃げ切られてしまうことである。

この逃げの俊敏さを見て、すぐに「これはガリだ」と気付くまでになるには、犬たちとともに何十年も猪を追いかけて、戦い続けて分かることなのである。

このような至難の戦いで恐ろしい危険を強いられるガリの特徴は、メス猪の争奪戦が始まる交尾期特有の現象である。この時期だけオス猪同士で戦い、猟場では犬たちと戦い続け、とても強く速い猛者へと変身する。だからガリという名も、その期限定名の呼び名である。

基本的にはガリも猟野に君臨する大猪のことであって、年間を通



太郎号。ラン号とブル号の仔で、良い種牡である



やっぱり獲れた日の一杯が格別。それも塩とコショウで焼いた猪肉が一番旨い。左から北嶋氏、加藤氏、平野氏、筆者

して大山の頂点付近や保護区などの人目のつかない所で、山の主的な存在で生き長らえている。
ある時は大猪として、そしてある時はガリとなつて突如戦いの場に出現するので、ガリと気付かなくても当然であり、至難の戦いになるので猪に逃げられても仕方ないのである。

そんな偶発的な要因が重なった中であつても、北嶋氏は先頭に立ち、親方として実に見事にガリ戦を戦ってくれた。

思えば、全く猪の獲れなかつたあの頃の北嶋氏たちが二年間も実戦で頑張り、「猪など獲れて当たり前だ」と、安心して見ていられたところまで腕を磨いて成長してくれた。今日の大一番でも、全員一丸となつて見事な実戦ができるのは凄いことである。

この集大成の大事な戦いが、滅多にないガリとの戦いとなつたので、「大物だぞ！ 注意しろよ」と何度も戦いの途中で呼びかけたが、「ガリだぞ！」とはあえて告げなかつた。

それはこの二年間の実戦の中でガリとの出会いがなかつたことから、一番教えたいガリとの戦法を見せられなかつたので、「ガリだぞ！」と知らせると全員が不安を持つてしまい、せつかく攻め込んでいる作戦の邪魔をしたくなかつたのである。

「大物だぞ！ 注意しろ！」と北嶋氏に告げて、「お前たちで

戦ってみろ」と任せたのは、「もう大丈夫だ。彼らなら必ずできる」と信じたからである。

この大一番が恐ろしく危険なガリとの戦いであつても、今までもおり安全第一で、上方から上手に攻略して堂々と勝負することで集大成にしてほしかったのである。

やっとここまで登り詰めて目指した頂点に立つたのである。そこは雑木林の山平であるが、これほど高くて最高の喜びはない。全員が歓喜に酔いしれている。ワイワイ、ガヤガヤと思ひ思ひの話に花が咲き、至福の時が流れていた。

大汗がひき、犬たちも落ち着いた頃合を見計らつて、北嶋氏が「さあ、後ひと頑張りだ。田宮さんは犬たちを頼みます。猪は俺たちで引き下ろしますから……」と、まっ先に立つて、一気に小沢に向かつて引き下ろしている。すぐ後に続くと、犬たちが猪に咬み付き邪魔するので、しばらくその場で待つて様子を見ながら「もう俺の役目もここまでだなあ」と心から満足して、ここまで成長した全員に感謝していた。(つづく)